

暮らしと交流



出土した石器の多くは、木の実など植物性の食料を加工する磨石や敲石(1・2)で、石皿(3)と合わせると全体の半数を超えます。狩猟や漁撈の道具(4～6)は少なく、植物が主な食料だったと考えられます。

石器に使われた石材の多くは、遺跡から半径20キロメートル以内で入手可能なものでしたが、ヒスイ(7～10)など遠方から運ばれた石材も出土しています。さらに、200点以上ものアスファルト塊(11)や、関連する遺物が見つかったので、遠い地域の人々とも交流があったことがうかがえます。



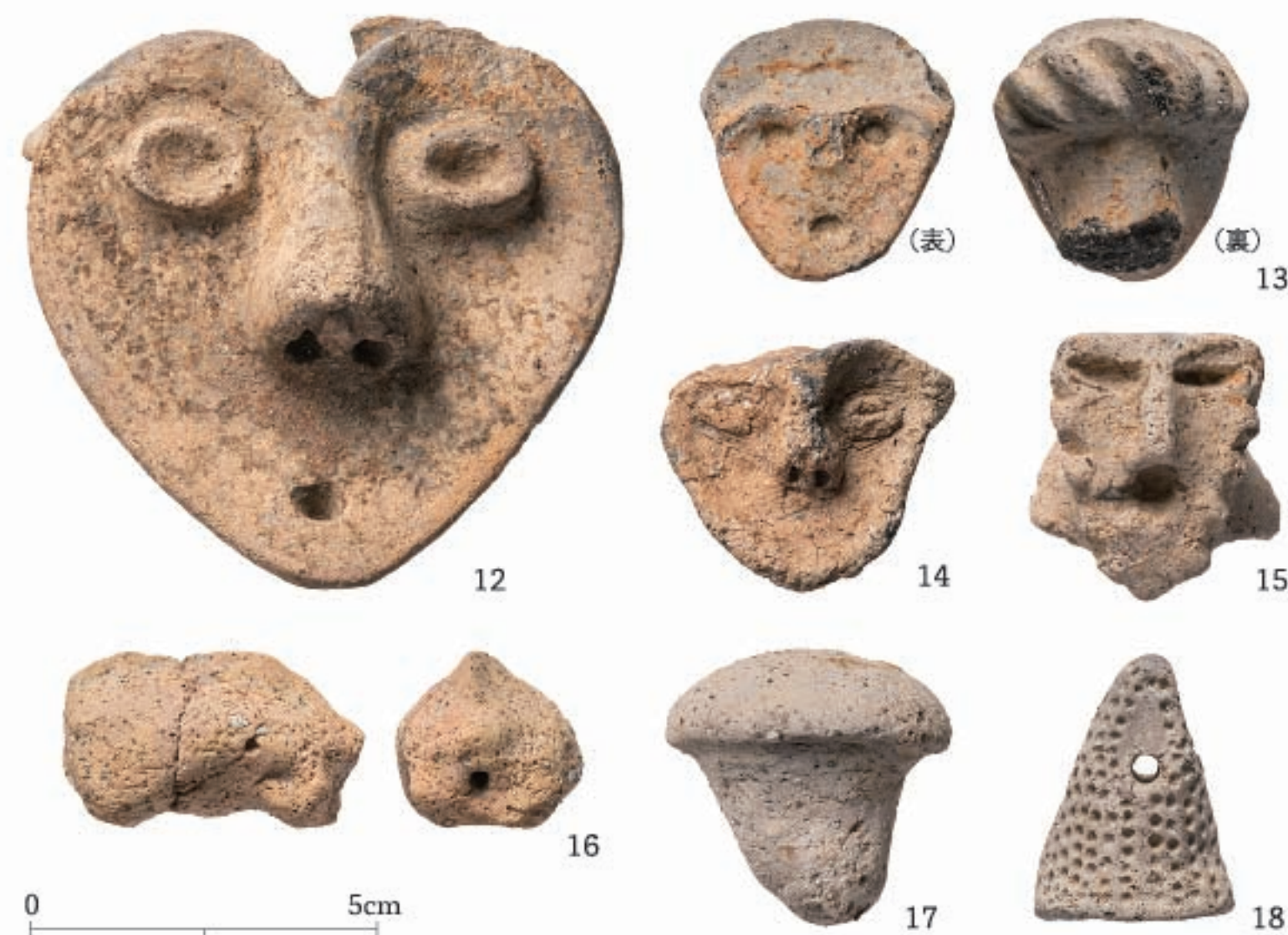
出土した石器やアスファルト塊

不思議な出土品



県内最大のハート形土偶(12)をはじめ、個性的で不思議な遺物が数多く出土しました。土偶(13～15)や、イノシシをかたどった動物形土製品(16)、キノコ形土製品(17)など、当時の人々の暮らしや祈りに関わる道具と考えられますが、使い方ははっきりしていません。

三角形で穴のあいた土製品(18)は、耳飾りとして使われたと考えられています。土製の腕輪や垂れ飾り、玉とともに、儀式や祭祀の際に身につけた装飾品だったのでしょう。



出土した土偶や土製品

遺跡の活用



土橋遺跡の発掘調査は、コロナ禍のなかで実施されました。屋外での作業とはいえ、マスクの着用など、これまでにない不安や不自由さを感じながらの調査となりました。それでも、知恵を絞って工夫を重ねることで、発掘調査や普及活動を継続することができました。

その成果の一つが、地元の小・中学生に協力してもらい制作した動画「よみがえる土橋遺跡」です。動画は「阿賀野市公式チャンネル」でご覧いただけます。ぜひご視聴ください。



動画はこちらから



動画制作の様子

【謝 辞】

本企画展を開催するにあたり、下記の皆様および関係諸機関よりご協力とご支援をいただきました。深く御礼申し上げます。
大月清也 熊木里子 鶴田浩規 奈良貴史 村上章久 阿賀野市教育委員会 新潟医療福祉大学自然人類学研究所

【主な引用文献】

阿賀野市教育委員会 2023 『土橋遺跡』
古澤安史・村上章久・奈良貴史 2024 「縄文時代後期の四角く並べられた焼人骨」『季刊考古学』167 pp.83-84・口絵

「土橋遺跡－阿賀野川中流域の縄文時代後期集落－」展示解説リーフレット

◆発行日：2025年6月21日
◆編集・発行：阿賀野市生涯学習課 〒959-1919 阿賀野市山崎 77 TEL:0250-62-5322
◆印刷：フォーカル



2025年度 阿賀町郷土資料館・阿賀野市歴史民俗資料館合同企画展「原遺跡と土橋遺跡－阿賀野川上・中流域の縄文時代中～後期集落－」



－阿賀野川中流域の縄文時代後期集落－

2025 6.21(土) 11.30(日)

二会場同時開催 | 入館料無料

阿賀町郷土資料館では、原遺跡－阿賀野側上流域の縄文時代中期集落－を開催しています。



阿賀野市歴史民俗資料館 開館日：土日・祝（9：30～16：30）

〒959-2204 阿賀野市福永 910 TEL：0250-62-5322（生涯学習課文化行政係）

Mail：syogaigakusyu@city.agano.niigata.jp

展示解説
リーフレット

土橋遺跡の概要

土橋遺跡は、阿賀野川の旧河道近くに位置する、平安時代と縄文時代の遺跡です。

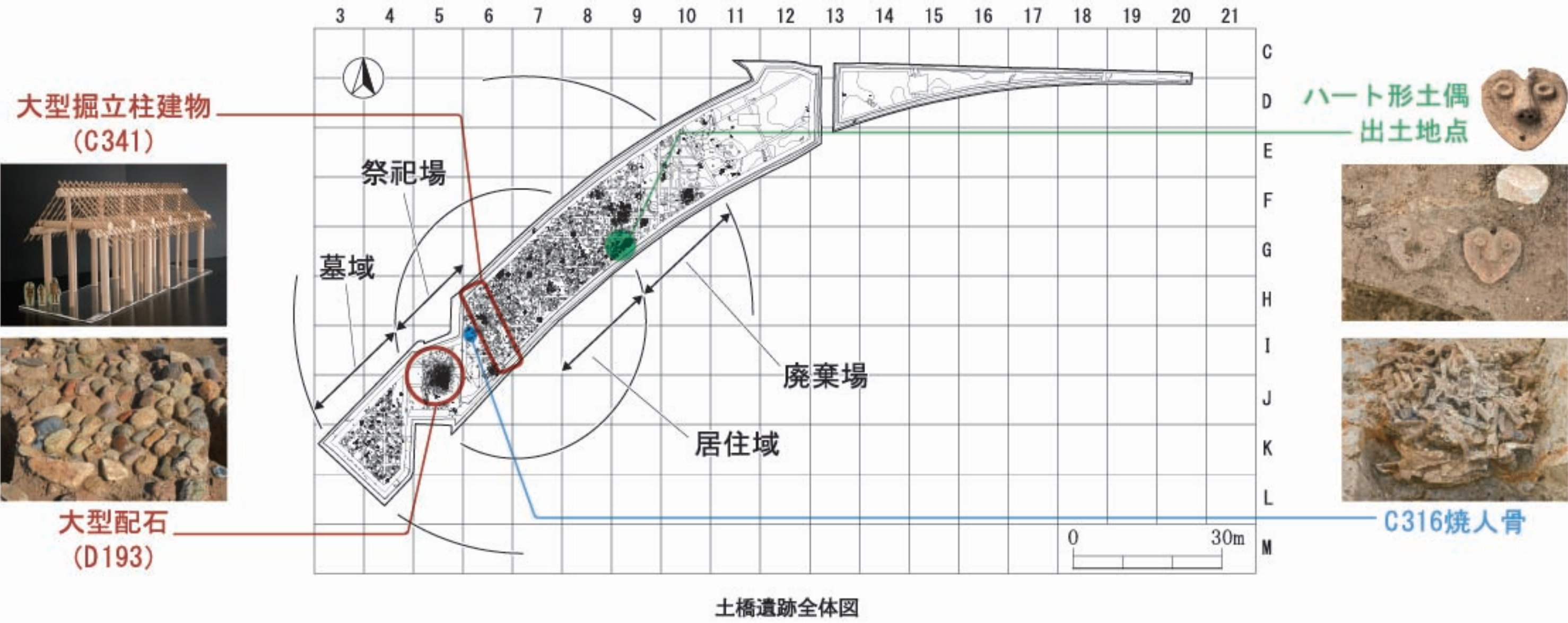
2019年から2020年にかけて、県道交差点の工事に先立ち、阿賀野市教育委員会が発掘調査を行いました。その結果、縄文時代後期初頭から中葉にかけて(約4,000年前)の大規模な集落跡が発見されました。この集落は、山地や丘陵から平野部へと移動してきた縄文人たちが、川のほとりに営んだ拠点的な生活の場であったと考えられます。

本企画展では、発掘調査で明らかになった集落の様子や出土したさまざまな遺物を紹介します。

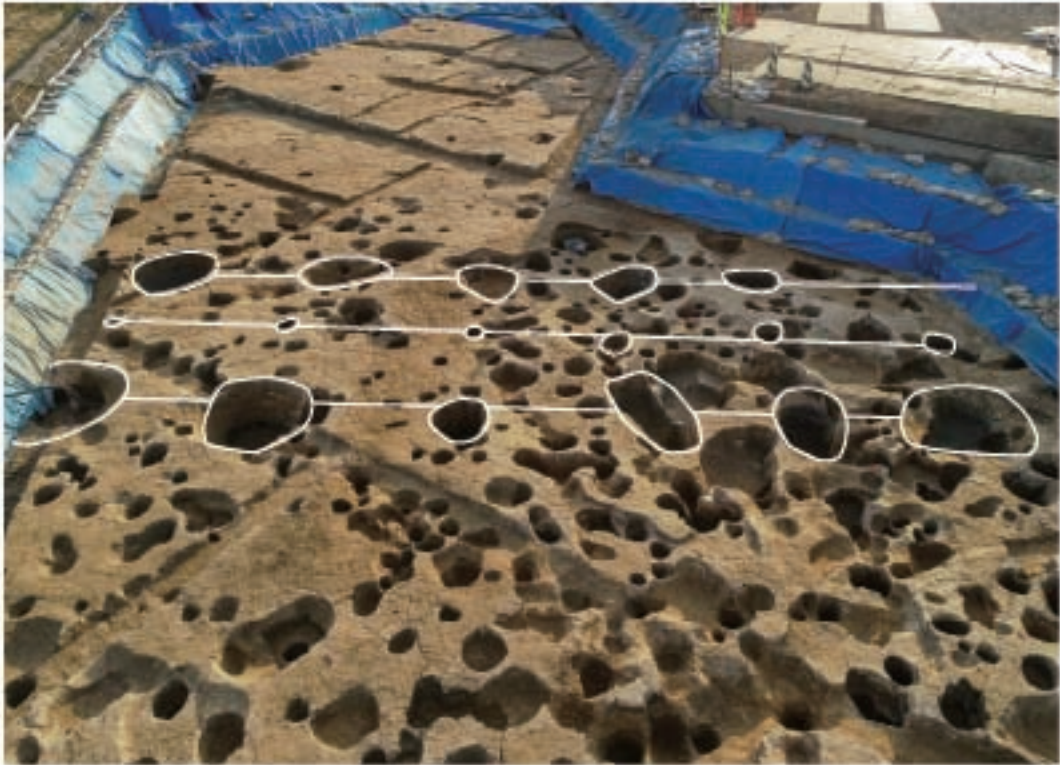
集落と建物について

土橋遺跡の集落は、直径およそ100メートルの二重構造を持つ環状集落であったと考えられます。外帯の東側は廃棄場、西側は墓域、内帯の東側は居住域、西側は祭祀場から構成されます。居住域と祭祀場の境界付近には、大型掘立柱建物が建てられており、そのすぐ隣の祭祀場には、繰り返し造られた大型配石や大型礫群が配置されていました。

大型掘立柱建物(C341)は、南北方向に13.5メートル以上、面積は75平方メートル以上と推定され、同時期の下越地方の遺跡の中でも、特に大きな建物です。また、大型配石(D193)は、東西4メートル、南北3メートルの範囲にわたり、緑・白・青灰色の石が整然と並べられており、ともに特別な施設であったと考えられます。



土橋遺跡の近景 (西から)



大型掘立柱建物 (C341) 東から



大型配石 (D193) 南西から

焼けた人骨

大型掘立柱建物の西側中央の土坑から、焼けた人骨が出土しました。人骨が出土した土坑の番号から「C316焼人骨」と呼ばれています。

焼人骨は、上腕骨や大腿骨などの四肢骨が、意図的に四角く並べられた状態で埋葬されていました。骨の調査から、この人物は25歳から30代の男性で、生前に抜歯の風習を受けていたことがわかりました。また、死後それほど時間をおかずに、十分な高温で遺体が焼かれたと推定されています。

縄文時代の遺跡で、1体分のほぼ全身の焼けた骨が残っている例はとてもめずらしく、極めて貴重な資料となっています。



C316焼人骨の出土状況 (東から)



意図的に配置された上腕骨



復元されたC316焼人骨 (右上腕骨 長さ22.2cm)

出土土器の変遷

発掘調査では、総重量8.1トンもの土器が出土しました。最も多かったのは煮炊き用の深鉢です。このほかに浅鉢、壺、注口土器、蓋、ミニチュア土器など、多様な器種が確認されました。これらは、縄文時代後期初頭から中葉の土器で、時期ごとに土器系統の変遷が見られます。

後期初頭から前葉は、地元の三十稻場式土器が主体ですが、東北部の十腰内式土器や、東南部の綱取式土器も出土しています。後期前葉は、地元の南三十稻場式が主体を占めます。はじめは、新潟県北部(阿賀北地域)の土器の特徴と共通するものが多く見られますが、次第に長野県からの影響を受けた中越地方の土器が増加します。ところが後期中葉には、関東の加曽利B1式土器とよく似た土器が主体を占めるようになります。

また、集落内での土器の分布から、南三十稻場式土器の時期に、集落規模が最も拡大したことが明らかになりました。



出土した土器 (後段左端 高さ42.6cm)